

「思考力を高める学習指導のあり方」

～「きく」・「話す」活動を通して～

1. 設定理由

私達を取り巻く社会は便利さを極め、日常生活においても、試行錯誤や工夫をしなくても大抵のことが済んでいってしまい、「考える機会や必要性」は減っている。このような社会にあっては、将来を生き抜くために、学習や体験を通して多くの事を学ばなければならない子ども達にとっても生きる力は必然的に身に付きにくい現実がある。子ども達の実態として、「言われることはできるけど・・・考えて行動するとなると・・・」と一様に口をそろえて評されることが多々ある。

そこで、昨年度は、「思考力を高める学習指導のあり方」を主題として研究に取り組んだ。

「思考力」を目指す上で、表現力は思考過程を整理するために欠くことができないと考え、学習過程の「追究する場面」・「磨き合う場面」において「書く」・「話す」活動を工夫して、子どもの思考力を高める有効な学習指導を追究した。本年度も引き続き「思考力を高める学習指導のあり方」について取り組む。昨年度課題として残った「話し合うことでの思考の深まり」に視点を置く。その原因について考えた時、「きく」活動に課題が見つかった「きく」活動を充実させることで、「自分の考えを話す」ばかりでなく「他者の考えをきいて、自分の考えを再構築する」力を身に付けさせることが思考を高めると考えた。

2. 研究仮説

問題解決的な学習過程において、きく・話す活動を充実させるための工夫をすれば、自分の考えを広げたり深めたりすることができるようになり、思考力が高まるだろう。

3. 研究内容

本テーマに対して、小学校では第6学年理科、中学校では第3学年数学科の授業実践を通して、思考力を高める学習指導のあり方を探っていく。

4. 結論

- ・「問題解決学習」において思考力を高めるには「課題把握」が大切である。
- ・きく・話す活動を活発化する教材・教具、教室環境づくりの工夫は有効である。
- ・思考を整理するための手立てとして、「メモをとる」ことは有効である。
- ・「きく」・「話す」活動においては相手意識をもたせることが大切である。
- ・集団思考を高めるためには学習形態の工夫や発問（声かけや促し）が大切である。